

---

# 落ちこぼれ魔女と神父様

OL

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

落ちこぼれ魔女と神父様

### 【Nコード】

N7926Z

### 【作者名】

OL

### 【あらすじ】

アリサは人間の神父に育てられた出来損ないの魔女。魔法使いからは出来損ないとバカにされ、人間からは魔女と嫌われているけど、優しくてちょっと腹黒いローレル神父に見守られながら一人前の魔女になるため、修行中！

人間が暮らすヘイムダルの森にAランクの使い魔、レッドドラゴンが封印されていると知ったアリサは同級生のデモンを見返すために、レッドドラゴンを使い魔にしようと計画するが。

## アリサと赤いドラゴン

深い森の中、湖のほとりの広い野原でティンクは非常に困っていた。  
「やめようよ、アリサ」

ティンクは自分が非常に情けない声を出していることを自覚していた。

「今回は大丈夫よ！ちゃんと飛べるわ！」

そんなティンクの言葉に耳を貸さずに、アリサは古い箒にまたがった。

「だいたい、ティンクは心配性なのだ。」

自分だっていつまでも失敗ばかりしているわけではない。

「また、神父様に怒られるよ。」

失敗すると決めつけているティンクは狐のようにとがった耳を丸める。

「大丈夫よ！ローレルは街に買い物に行っているわ。ちょっと飛んで戻ってくればばれないわよ。」

そういうと、アリサはトウ！と地面を蹴り上げた。

「ああ・・・」

ティンクは狐のようなしっぽを丸めて、がっくりと肩をおとした。

そもそも、アリサは魔法がへたくそなのだ。

この前、箒の練習をしたときは酷かった。

飛び上がった瞬間、箒はアリサを置いて制御不能に陥った。アリサは箒を必死に走って追いかけたが、箒はアリサの言うことを聞かず、ローレル神父の寝室の窓ガラスを突き破り、ようやく止まったのだ。  
った。

今回は上手にアリサを乗せて箒は浮かび上がった。

ティンクはため息を一つつくと、コウモリのような羽を大きく広げ、アリサのそばに飛び立った。

「アリサ、慎重にね。神父さんに練習を止められているんだから。」

箒はきつちり7メートルの高さを保ってゆっくりと前進するアリサをティンクは不憫に思った。

そもそもヘイムダルの森で魔法の練習をしなくてはならないのがおかしいのだ。

本来だったらフレイの魔界学校の校庭で練習するべきことだった。デモンがいつまでたっても魔法が上達しないアリサをからかうから悪いのだ。

「神父に育てられた、出来損ない魔女」と。

そんなことを考えていたとき森の気まぐれな風が大きく吹き上げた。

箒はバランスを崩し、アリサを振り落とす。

ティンクはアリサの服をつかんだが、ティンクの小さな羽ではとてもアリサを支えられなかった。

出来損ないなのは僕も同じだと、ティンクは思った。

黄色い狐にコウモリのような羽の生えた、雑種の出来損ないの使い魔。

地面がどんどん近づく。

ぶつかる!!

つと衝撃に備えた瞬間大きな手がアリサを包む。

「幕の練習をしてはいけないと、教えませんでしたか？アリサ。」

ローレル神父は穏やかな声でアリサに問いかけた。

走ったためか、美しいブロンドの髪が乱れている。

思ったよりも少ない痛みにアリサは恐る恐る目を開ける。

そして、こう思った。

地面にぶつかって気絶したほうが、怖くなかったかもしれない。

## アリサと赤いドラゴン

アリサは痺れきった足をさすりながら口を尖らす。  
ティンクはそんなアリサを慰めるように右手に頭を押しつけた。

「あんなに怒ることないのに。」

それでもアリサは唇を尖らす。

「でも、神父様がいなくなったら大けがだったよ？  
包帯なんて巻いて学校に行ったら、絶対にデモンにバカにされるよ？」

月明かりがほこりっぱい部屋に差し込み、埃がキラキラと光っている。

おれてしまった筈が無惨にドアの脇に立てかけてあった。

「怪我だったら、私の薬湯ですぐに直せるもん。  
何も筈をおることはないのに。」

アリサの大きな瞳からあふれだした涙が頬をつたう。  
緑色の大きな瞳はまるでヘイムダルの森のほとりの湖のようだ。  
ティンクは優しくアリサの涙に鼻を押しつける。

「んふふ、ティンク、鼻が冷たい。」

こうすれば、アリサが笑うことを知っているから。

神父様は礼拝堂で何かを削っていた。

「アリサは寝たのかい？」

礼拝堂に低く優しい神父の声が響く。

「うん。眠ったよ。アリサ、泣いていたよ。」

神父は作業をやめてティンクの方をに目を向けた。

蠟燭の優しい炎が神父の美しいブロンドを照らす。

「私が怒ったからかい？それとも箒がおられてしまったから？」

「両方だと思うよ。ヘイムダルの森で空を飛ばうとしたアリサも悪いけど、神父様も2時間もアリサに正座をさせるなんて。しかも箒を折ってしまうなんて酷いよ。」

ティンクは毛を逆立てて、神父様に抗議をしたが神父は感心がないようにさらに作業に集中していく。

「だいたい、デモンがアリサをいつもバカにするのがいけないんだ。人間に育てられた出来損ない魔女って。学校の校庭で練習をしようとする、いつつ仲間を引き連れてまだ空もまともに飛べないのかって、みんなで笑うんだ。」

だから、アリサはヘイムダルの森でしか魔法の練習ができないんだ。

「

蠟燭はゆらゆらと炎を揺らしながらあたりを照らす。

神父はなにも言わずに黙々と作業を進めていた。

ティンクは沈黙に耐えられなかった。

「神父様が心配するのわかるよ。」

アリサは魔法がへたくそだし、もしも湖に落ちていたら大変だ。それに人間にみられたらまた石を投げつけられて、アリサはとつても傷つくだろうし。。。。」

ティンクの耳は、声と一緒に小さく丸まっていく。

「できた。」

ローレルはパチンと、糸を切ると立ち上がる。

ティンクの緑色の翡翠のような瞳が蠟燭に照らされてキラキラと輝いた。

「神父様、それってアリサの箒？」

ローレルは職人が作ったような美しい流線型の箒と、蠟燭をもって礼拝堂からであると、アリサの部屋に向かう。

「人間の作った掃除用の箒ではコントロールが難しいのは当たり前だ。前々から作ってやらなくてはと思っていたんだ。今度からは、私がいるそばで練習するようにとアリサに伝えなさい。」

ローレルはアリサの部屋におかれた無惨におれた箒の隣に、新品の箒を置くと泣きつかれて眠ってしまったアリサに毛布をそっと掛ける。

桃色の頬は涙に濡れてじつとりと熱を持っていた。

冷えた礼拝堂で作業していたため冷たくなったローレルの手が気持

ちいいのか、アリサはその手に頬を押しつける。

「この甘えん坊の魔女に、神のご加護を。」

銀色の月はローレルとアリサを優しく見守っていた。  
ティンクもアリサの足下に丸くなる。

明日はアリサが笑ってくれるといいなと思いつながら。

## アリサと赤いドラゴン

アリサは魔法使いの町フレイの魔界学校に通っていた。

魔法使いの町フレイに初めて来た時、アリサは何もかもがトンチンカンなこの町に酷く驚いたのだった。

素朴な人間の町ヘイムダルの更に奥地である、ヘイムダルの森のほとりに住んでいたアリサにとって、魔法使いの町は驚くほど都会であつた。

空から地面に伸びる高層ビルの真ん中を魔法のトレインが走り、箒が走りかう高速道路は風の影響がないように魔法のガラスカプセルで覆われていてその中をいくつもの箒が流れ星のように走っている。交通安全のために、箒には反射版をつけなくてはいけないのだ。

アリサはフレイとヘイムダルの境にあるヘイムダルの森の木の幹から、フレイの魔界学校に通っていた。

どうしても、ローレルと住み慣れたヘイムダルの森から離れ、空中に浮く都市フレイに住む気にはなれなかつたのだ。

そんなアリサを、デモンはいつもバカにした。

「出来損ないの魔女」と。

デモンはその日、Bクラスの使い魔へアリージャック種のレディを使いこなし、その日の課題であるドワーフの髭を手に入れた。

レディーは黒く美しい姿態で大きなドラゴンの羽を持つ最も美しい使い魔と呼ばれる種族の純血種だ。

もちろん、アリサも課題のためにティンクと健闘したが、ドワーフの小槌に叩かれ動けなくなったティンクをレディーが助ける形でデモンは課題を達成した。

ティンクに小槌で立ち向かったドワーフもレディーの牙にはひとたまりもなかったのだ。

先生はデモンのことをクラスで一番優秀だとほめたたえていた。アリサは授業が終わっても黙って下を向くよりほかなかった。

「ごめんね、アリサ。」

薬湯をちびちびと舐めながらティンクはアリサに謝る。

自分ももっと強い使い魔だったら、アリサがバカにされることはなかったのに。

「うん、たとえばティンクがドワーフを捕まえても私はきつとドワーフの鬚を切ることはできなかったわ。」

アリサは校庭の裏にある魔法の畑のそばにウサギが掘るような小さな穴を掘る。

しっかりと土が軟らかくなるまで、掘っていく。

アリサの大きな目には、また涙の湖ができているが、今度はそれがこぼれることはなかった。

「私も薬湯を作るのに、ドワーフの鬚も、トカゲのしっぽも、ピクシーの羽も使っているわ。」

動かなくなつたドワーフをフレイの雑貨屋さんで買ったお気に入りのハンカチで優しく包むと、穴にそつと横たえる。

「でもね、自分でドワーフの髭を切ることはできないわ。私はとつても弱虫の、出来損ないの魔女なのよ。」

小さな穴に土を戻しながらアリサはそういった。

ティンクはアリサの薬湯でほとんど痛みがなくなつた傷を早く治るようにペロペロと舐めた。

「本当に出来損ないの魔女だな。」

誰もいないと思つていたのに、後ろから突然デモンに話しかけられて、アリサはびっくりした。

「髭を切られたドワーフの為に、いちいち墓を作るなんて。だから、人間って奴は土地を有効活用できないのさ。」

魔法の世界では墓なんて、存在しない。

そもそも、魔法使いは死なないのだ。

永遠の命を手に入れてこそ一人前の魔法使いになれる。

卒業までに永遠の魔法の命を作り上げるために魔界学校はあるのだ。

「おまえみたいな雑種の使い魔しか操れないような出来損ないが、畑に変なもの埋めるなよ。」

アリサが優しく盛つた土を踏みしめながらデモンは笑う。

アリサは悔しくて下唇をぎゅつと噛みしめた。

レディーはデモンの方を見るでもなく念入りに毛つくりをしてい

る。

テインクは情けないやら悔しいやらで自分のしっぽが大きく膨らんでいくのを感じた。

すっかり暗くなったヘイムダルの森を突き進みながら、  
アリサは怒っていた。

「酷いわ。本当にデモンなんて最低。絶対に見返してやるんだから。」

テインクはコウモリのような小さな小さな羽をパタパタさせながら、アリサのそばを飛ぶ。

「どうやって？ 実際アリサには僕みたいな雑種の使い魔しかいないじゃないか。」

アリサは立ち止まると、テインクに向きなおる。

テインクの鼻もとに指をビシッと突き出すと、

「テインクは立派な使い魔よ！」と高らかに宣言する。

だから、テインクはアリサが好きなのだと思う。

「そうだわ！ Aランクの使い魔を召還して従わせればいいんだわ。そうしたら、テインクはAランクの使い魔より上のランクになるじゃない！！」

アリサが突拍子もない思いつきをしなければもっと好きになるのに、とテインクは思った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7926z/>

---

落ちこぼれ魔女と神父様

2011年12月25日20時57分発行